

# 高等学校家庭科における学習効果に関する一考察

大橋 登史子

Toshiko Ohashi

## はじめに

家庭科教育は、その性格である、小学校、中学校、高等学校を通じて実践的・体験的な学習を行い、その効果が生活現象における個々の生徒のもつ問題解決の中に還元されてはじめて、本来の特異性が生きてくるものであらうと思われる。

そこで今回は高等学校の生徒を対象に家庭科学習に対する意識が、中学校の生徒の場合とどのように異なり、また変化しているかについて知ろうとするものである。

## 方法

1. 調査方法は、質問紙法で、対象は倉敷市内の県立高等学校4校（普通科2校、商業科1校、女子高校1校）と、岡山市内の家政科のある県立高校1校で、1校あたり100名の計500名に配布した。回収率は96.2%（481名）であった。（A表） 昨年調査した中学校は、今回の調査対象高校の学区内である。

なお調査対象者の家庭状況については、生徒の関係のあるものを示した。（表B）

2. 調査年月日 1986年3月～4月

3. 調査内容

- 1) 高校生の家庭科学習に対する興味・関心
- 2) 高校生の家庭での手伝いの状況
- 3) 実習における学習効果
- 4) 高校生の望む家庭科の教師像
- 5) 高校生の今後の家庭科学習に対する評価
- 6) 男女共修時における生徒の望む学習内容

表A 調査対象

学年 学校	調査人数		合計	
	2年	3年		
倉敷A		96	96	普通科
" B	99		99	"
" C		91	91	女子高校
" D		95	95	商業科
岡山A		100	100	家政科
合計	99	382	481	

表B 両親の職業

	公務員	民間企業	"パート	自営業	内職	主婦専業	その他の職業	父無	母無
父	62(12.9)	292(60.7)	0	87(18.1)	0	0	18(3.7)	20(4.2)	2(0.4)
母	19(4.0)	74(15.4)	105(21.8)	50(10.4)	55(11.4)	135(28.1)	31(6.4)	1(0.2)	11(2.2)

## 研究結果および考察

### 1. 高校生の家庭科学習に対する興味・関心

#### 1) 家庭科学習に対する興味・関心

表1-1に示すように、家庭科学習が、「好き」か「きれい」かについて見ると、家庭科が「好き」という者165名(34.3%)に対して、「どちらでもよい」という者が290名(60.3%)で、「きれい」の23名を併せると313名(65.7%)のものは関心度の低いことが見られる。家庭科が好きであるものは、中学校の161名(25.8%)に比べると、34.3%と高くなっており、ことに家政科では44.0%が好んで学習するものが多くなっている。しかし「どちらでもよい」とするものが中学校の51.4%よりも高く60.3%と増している。

表1-1 家庭科学習に対する興味・関心

	すき	どちらでもよい	きれい	答なし	人数(%)
全体平均	165(34.3)	290(60.3)	23(4.8)	3(0.6)	481(100)
家政系高校	44(44.0)	54(54.0)	2(2.0)	0(0)	100
普通・商業	121(31.4)	236(61.9)	21(8.0)	3(0.1)	381
中学校	161(25.8)	320(51.4)	96(15.4)	46(7.4)	623(100)

表1-2 家庭科学習のすきな理由

	全体がすき	裁縫・手芸が好き	調理がすき	子供を育てる	洗たく・掃除	着られる洋服	答なし	人数(%)
全体平均	17(3.5)	46(9.6)	80(16.6)	5(1.0)	1(0.2)	16(3.3)	316	481(100)
家政系高校	6(1.2)	15(3.1)	17(3.5)	0	1(0.2)	5(1.0)	56	100(100)
普通・商業	11(2.3)	31(6.5)	63(13.1)	5(1.0)	0	11(2.3)	260	381

家政系高校、普通・商業 \*

表1-2の「好き」な家庭科学習では、調理80名(16.6%)、裁縫・手芸46名(9.6%)で調理の方が好まれている。この傾向は中学校の場合でも、調理はおいしいものが食べられる12.1%で同じ傾向である。

表1-3の「きれい」な理由について見ると、家庭科全体がきれいとするものは、普通科、商業科にみられる12名(2.5%)である。家政科には「きれい」とするものは皆無である。きれわれ

表1-3 家庭科学習のきれいな理由

	全体がきれい	わからな	洋服を縫うのがきれい	調理がきれい	買物	住まいを考える	答なし	人数
全体平均	12(2.5)	3(0.6)	8(1.7)	0	0	0	458	481
家政系高校	0	0	2(0.4)	0	0	0	98	100
普通・商業	12(0.3)	3(0.6)	6(1.2)	0	0	0	350	381

ている領域は被服で「服を縫うのがきれい」というものが8名(1.7%)である。

### 2. 高校生の家庭での手伝いの状況

#### 1) 高校生の家庭での手伝いの状況 (表2-1)

①洗たく・アイロンかけをしている者が最も多く、「よくする」56名(11.6%)と、「ときどきする」365名(75.9%)を併せると421名(87.5%)の者が手伝っていることになる。中学生の場合も82.5%で、この分野の手伝いの多いことがみられる。

②食事のしたくでは、「よくする」36名(7.5%)「ときどきする」284名(59.0%)を併せると320名(66.5%)で「洗たく・アイロンかけ」の方が多くなっており、中学生の場合も同じ傾向である。

③掃除・整頓では、「よくする」36名(7.5%)、「ときどきする」325名(67.7%)を併せると361名(75.2%)になっており、中学生では(69.3%)で、中学生より高校生が、家庭の掃除・整頓を多く手伝っている。

④買物では、「よくする」124名(25.8%),「ときどきする」262名(54.5%)を併せると、386名(80.3%)で、買物が家事労働の参加では洗たく・アイロンかけについて多い方である。

⑤老人・幼児の世話ならびに家族の相談相手などの人間関係では、祖父母と同居の生徒は全体的に見て20~30%であるし、幼児との生活も直接していないが、老人・幼児の世話は約90%で、かなりの生徒が世話をしていることになっている。

また家族の相談相手については、「よくする」は222名(46.1%)で、老人・幼児の世話よりは減少しているが、「ときどきする」119名(41.4%)を併せると421名(87.5%)になり、よくしていることになっている。中学生の老人・幼児の世話540名(86.7%)ならびに家族の相談相手532名(85.3%)を比較すると高校生の方が少し多くなっている。

表2-1 高校生の手伝いの状況

	洗たく, アイロンかけ	食事のしたく	掃除 とん	買物	老人, 幼児 の世話	家族 の相談相手	
高 校 生	よくする	56(11.6)	36(7.5)	36(7.5)	124(25.8)	371(77.2)	222(46.1)
	ときどきする	365(75.9)	284(59.0)	325(67.7)	262(54.5)	91(18.9)	199(41.4)
	しない	59(12.3)	160(33.3)	119(24.7)	94(24.7)	17(3.5)	58(12.1)
	答なし	1(0.2)	1(0.2)	1(0.2)	1(0.2)	2(0.4)	2(0.4)
	合計	481	481	481	481	481	481
中 学 生	よくする	175(28.1)	124(19.9)	67(10.7)	184(29.6)	410(65.8)	345(55.3)
	ときどきする	399(54.4)	357(57.3)	365(58.6)	305(48.9)	130(20.9)	187(30.0)
	しない	101(16.2)	136(21.8)	103(29.4)	126(20.2)	41(6.5)	78(12.5)
	答なし	8(1.3)	6(1.0)	8(1.3)	8(1.3)	42(6.8)	13(2.2)
	合計	623	623	623	623	623	623

☆高校生・中学生 洗たく・アイロンかけ \*\*\* 食事のしたく \*\*\*  
掃除・整とん \*\* 老人, 幼児の世話 \*\*\* 家族の相談相手 \*\*\*

2) 家族員と仕事に対する認識 (表2-2)

①子どものしつけでは、表2-2に示すように、「父・母」が対等にしている者か278名(57.8%)で最も多い。次いで「家族全員」がしているものが96名(20.0%)となっており、つぎは「母」がしている者か93名(19.3%)となり、子どものしつけは、父母、家族全員であるものかと思っている。中学生では、「父・母」363名(58.3%), つぎは「母」124名(19.9%)になっており、殆んど同じ傾向にある。

表2-2 家族員と仕事に対する認識

	子どものし つけ	近所とのつ き合い	親類とのつ き合い	生活費を家 庭に入れる	学校などの 集りに出席	
高 校 生	父	7(1.5)	0	5(1.0)	270(56.1)	8(1.7)
	母	93(19.3)	78(16.2)	11(2.3)	0	367(27.3)
	父・母	278(57.8)	31(6.4)	48(10.0)	192(39.9)	66(13.7)
	祖父母	2(0.4)	7(1.5)	3(0.6)	2(0.4)	1(0.2)
	家族全員	96(20.0)	350(72.8)	402(83.6)	7(1.5)	7(1.5)
	その他	2(0.4)	4(0.8)	4(0.8)	3(0.6)	6(1.2)
	わからない	1(0.2)	9(1.8)	6(1.2)	4(0.8)	24(5.0)
	答なし	2(0.4)	2(0.4)	2(0.4)	2(0.4)	2(0.4)
合計	481	481	481	481	481	
中 学 生	父	19(3.1)	5(0.8)	10(1.6)	280(44.9)	9(1.5)
	母	124(19.9)	115(18.5)	10(1.6)	22(3.5)	376(60.3)
	父・母	363(58.3)	65(10.4)	83(13.4)	224(35.9)	82(13.2)
	祖父母	2(0.3)	15(2.4)	20(3.2)	9(1.5)	3(0.4)
	家族全員	49(7.8)	348(55.9)	424(55.9)	16(2.6)	20(3.3)
	その他	3(0.4)	3(0.4)	4(0.5)	1(0.1)	22(3.5)
	わからない	9(1.5)	18(2.9)	16(2.6)	11(1.8)	42(6.8)
	答なし	54(8.7)	54(8.7)	56(9.0)	60(9.7)	69(11.0)
合計	623	623	623	623	623	

高校生・中学生 (各項目) \*\*\*

②近所とのつき合いでは、「家族全員」であるかと思っている者か350名(72.8%), 「母」がしている者か78名(16.2%)である。中学生も「家族全員」であるかと思っている者か348名(55.9%)で同じ傾向である。

③親類とのつき合いでは、「家族全員」であるかと思っている者か402名(83.6%), 「父・母」がする

と思うものは48名 (10%) で大多数の生徒は、家族全員で親類とのつき合いをしようとしている。中学生は「家族全員」でしようとしている者は424名 (68.1%) で、高校生の方が中学生より多くなっている。

④生活費を家庭に入れるのは、「父」だとする者が270名 (56.1%) 「父・母」だとする者は192名 (39.9%) になっており、とくに母親の自営ならびに外勤の家庭が多いことから、母親の収入稼得を父親と同様に認めている。中学生も「父」280名 (44.9%)、「父・母」224名 (35.9%) で高校生と同じ傾向である。

⑤学校の集りなどの出席では、「母」が367名 (76.3%) 「父・母」だとするものが66名 (13.7%) である。保護者の参観日や、学芸会などは、母親が出席することが当然と思っている。中学生も「母」だとするものが376名 (60.3%) で同じ傾向である。

全体を通して家庭の仕事のまとめでは、表2-3に示すように家族に直接かかわりをもつものでは、父母が中心となるものとしており、近所や親類のつき合いは家族全員と思っている。中学生も同じ傾向である。

表 2—3 家族員と仕事に対する認識のまとめ

	子どものしつけ	近所つき合い	親類つき合い	生活費	学校の集り
1	父 母	家族全員	家族全員	父	母
2	家族全員	母	父 母	父 母	父 母

### 3. 実習における学習効果

#### 1) 調理実習における生徒の要求 (表3-1)

①高等学校における家庭科学習での技能の習得に対しては、調理実習に対する興味は表1-2に示すように80名 (16.6%) で、被服実習の46名 (9.6%) より高いが、全体的にみるとその率は低い方である。

表 3—1 調理実習における生徒の要求

対象	教授法 たのしい、面白い	プリントを用意する	実際に して見せる	おいしい 手作り	家でつ くれな いもの	ほめて くださ る	視聴覚 機器を 使う	テスト をよく する	答なし	人数
高校生	241 (50.1)	17 (3.5)	55 (11.4)	136 (28.3)	16 (3.3)	1 (0.2)	0 (0)	1 (0.2)	14 (3.0)	481
中学生	328 (52.7)	15 (2.4)	47 (7.6)	120 (19.3)	9 (1.4)	13 (2.1)	18 (2.9)	0 (0)	73 (11.6)	623

高校生・中学生 \*\*\*

授業そのものに対しては表3-1のように、「たのしい・面白い」授業を望むものが、241名 (50.1%) で、「おいしい・手作りのもの」が作れるとするものが、136名 (28.3%) おり、「実察にして見せてほしい」とするものは、55名 (11.4%) になっている。この傾向は中学生の47名 (7.6%) とも同じである。

#### 2) 調理実習における実技の習得状態

中学校の技術・家庭科の食物教材内容としてあげられているものと、高等学校家庭一般であげられているものについて、その実技習得状況を見ると、表3-2に示す通りである。「ひとり<sup>4</sup>でできる」調理では、たまご焼447名 (92.9%)、ポテトサラダ416名 (86.5%)、カレーライス432名 (89.9%)、みそ汁377名 (78.4%)、ハンバーグステーキ370名 (76.9%)、ピラフ366名 (76.1%) などいずれも70%をこえている。

ちらし寿しや茶わんむしは、「ひとり<sup>4</sup>でできる」とするものが142名 (29.5%)、208名 (43.2%)

になっており、「茶わんむし」は「ちらし寿し」よりは多い。しかしこれらの料理が「ひとりのできるようになりたい」とするものは、前者294名(61.1%)、後者184名(38.3%)になっている。

中学生と比較して見ると、高校生になって「ひとりのできる」ようになったものに、たまご焼(中学校80.8%→高校生92.9%)、ポテトサラダ(57.3%→86.5%)、カレーライス(68.9%→89.9%)、焼き魚(49.5%→68.0%)、天ぷら(39.5%→69.4%)、ハンバーグステーキ(41.0%→76.9%)などがあげられ、これらは高等学校での学習効果のあったものとみられる。この場合「ひとりのできる」という自己評価では、インスタント食品や、レトルト食品の活用が背景にあることもうかがえるので、教材選択の一考が必要であろうと思われる。調理は家庭生活とくに食生活の充実という点から不可欠な作業とみられるので、義務教育の段階で広がりをもてるように仕向けることも必要であろう。

表3-2 調理実習における実技の習得の要求

調理名	状態	ひとりのできる	できるようになりたい	できなくてよい	答なし
たまご焼	高	447(92.9)	17(3.5)	1(0.2)	16(3.3)
	中	503(80.8)	27(4.4)	13(2.0)	80(12.8)
ポテトサラダ	高	416(86.5)	40(8.3)	1(0.2)	23(4.8)
	中	357(57.3)	115(18.4)	44(7.1)	107(17.2)
みそ汁	高	377(78.4)	80(16.6)	3(0.6)	17(3.5)
	中	385(61.7)	101(16.2)	35(5.6)	102(16.3)
カレーライス	高	432(89.9)	28(5.8)	1(0.2)	20(4.2)
	中	420(68.9)	87(13.9)	19(3.0)	88(14.2)
焼き魚	高	327(68.0)	123(25.6)	13(2.7)	18(3.7)
	中	309(49.5)	156(25.1)	55(8.9)	103(16.5)
ちらしずし	高	142(29.5)	294(61.1)	22(4.5)	23(4.8)
	中	115(18.4)	292(46.9)	126(20.2)	90(14.5)
天ぷら	高	334(69.4)	117(24.3)	8(1.6)	22(4.5)
	中	246(39.5)	201(32.2)	77(12.4)	99(15.9)
ハンバーグステーキ	高	270(76.9)	87(18.1)	1(0.2)	23(4.8)
	中	255(41.0)	212(33.9)	63(10.1)	93(15.0)
ピラフ	高	366(76.1)	86(17.8)	4(0.8)	25(5.2)
	中				
茶わんむし	高	208(43.2)	184(38.3)	21(4.4)	20(4.2)
	中				
スポンジケーキ	高	313(65.1)	149(31.0)	8(1.7)	11(2.3)
	中				

高校生481名 中学生623名

高校生・中学生\*\*\*

2) 被服実習時における生徒の要求

①高等学校における家庭科学習での被服の技能の習得に対しては、生徒がどのような授業を望んでいるかについてみると表3-3に示すように、「実察にして見せる」291名(60.5%)で一番多く、「プリント・標本を用意して下さる」99名(20.6%)次は「声をかけてほめて下さる」45名(9.4%)になっている。被服実習の指導は、前述表3-1に示すように調理実習(11.4%)と異なり分からないところを生徒を集めて「実察にして見せる」ことが学習の理解を深め、作業能率を高めるに役立つことが分かった。その次は標本を沢山ついたり、縫い方のプリントを与えたらよいのではないかと思う。

表3-3 被服実習における生徒の要求

実数, (%)

	声をかけてほめて下さる	プリント・標本を用意する	実際にして見せる	能率や科学性がわかる	放課後おしえて下さる	校書がわかりやすい	視聴覚機器をよく使う	テストをよくする	答なし	人数
高校生	45 (9.4)	99 (20.6)	291 (60.5)	5 (1.0)	19 (4.0)	6 (1.2)	1 (0.2)	1 (0.2)	14 (2.9)	481
中学生	150 (24.0)	81 (13.0)	244 (39.2)	18 (2.9)	25 (4.1)	29 (4.7)	1 (0)	25 (4.1)	51 (8.2)	623

高校生・中学生\*\*\*

中学生と比べて見ると1位が「実際にして見せる」244名(39.2%)、2位は「声をかけてほめてくださる」150名(24.0%)になり、声をかけてほめてもらう方がはげみになるようである。

## ②被服実習における技能の習得状況

中学校の技術・家庭科の教材<sup>1,2,3</sup>内容としてあげられているものと、高等学校家庭一般<sup>4</sup>であげられているものについて、その技能の習得状況を見ると表3-4に示す通りである。

「ひとりでできる」被服実習では、「なみ縫い」454名(94.4%)、「ミシン縫い」452名(94.0%)、「ボタン・スナップつけ」452名(94.0%)、「エプロン」335名(69.6%)、などで70%をこえている。「ししゅうしたテーブルクロス」250名(52.0%)、「スカート」273名(56.8%)などは半数くらいは「ひとりでできる」が、「休養着」185名(38.5%)、「ベスト」94名(19.6%)、「ワンピースドレス」81名(16.9%)、「ジャケット」88名(18.4%)などはひとりでできる割合が低い。この教材に対して大学、あるいは短期大学で「できるようになりたい」という希望があるのでこの点を考慮して指導してゆきたいと思っている。

中学校より高等学校でできるようになったもの「なみ縫い」(中学校78.2%→高等学校94.4%)、「ミシン縫い」(75.9%→94.0%)、「ボタン・スナップつけ」(71.9%→94.0%)、「ししゅうしたテーブルクロス」(28.9%→52.0%)、「エプロン」(48.4%→69.6%)、「スカート」(36.8%→56.8%)「ブラウス」(14.9%→37.2%)、「休養着」(23.3%→38.5%)、のように「ひとりでできる」ようになったものが平均して15%~20%になっているので、高等学校での被服指導の効果があつたとみてもよいであろう。

## 4. 高校生の望む家庭科の教師像

高等学校の家庭科学習において生徒はどのような教師を望んでいるかについて示すと表4の通りである。「理解ある人」とする者が272名(56.5%)次に「指導力のある人」92名(19.1%)となっ

表3-4 被服実習における技能の習得の状況 実数, (%)

		ひとりでできる	できるようになりたい	できなくてよい	答なし	人数
なみ縫い	高	454(94.4)	8(1.7)	3(0.6)	16(3.3)	481
	中	486(78.2)	16(2.6)	23(3.6)	97(15.6)	623
ミシン縫い	高	452(94.0)	8(1.7)	1(0.2)	20(4.1)	481
	中	473(75.9)	34(5.5)	29(4.6)	87(14.0)	623
ボタン、スナップつけ	高	452(94.0)	9(1.8)	1(0.2)	19(4.0)	481
	中	448(71.9)	52(8.3)	27(4.4)	96(15.4)	623
ししゅうしたテーブルクロス	高	250(52.0)	120(25.0)	86(17.9)	25(5.2)	481
	中	180(28.9)	196(31.5)	148(23.7)	99(15.9)	623
エプロン	高	335(69.6)	71(14.8)	49(10.2)	26(5.4)	481
	中	302(48.4)	106(17.1)	106(17.1)	109(17.4)	623
スカート	高	273(56.8)	141(29.3)	48(9.9)	19(4.0)	481
	中	230(36.8)	156(25.1)	140(22.5)	97(15.6)	623
ブラウス	高	179(37.2)	200(41.5)	84(17.5)	18(3.8)	481
	中	93(14.9)	275(44.1)	161(25.9)	94(15.1)	623
休養着	高	185(38.5)	185(38.5)	82(17.0)	29(6.0)	481
	中	145(23.3)	212(34.1)	155(24.8)	111(17.8)	623
ベスト	高	94(19.6)	227(47.2)	130(27.0)	30(6.2)	481
	中					
ワンピース	高	81(16.9)	266(55.3)	118(24.5)	16(3.3)	481
	中					
ジャケット	高	88(18.4)	231(48.0)	145(30.1)	17(3.5)	481
	中					

ている。中学生の場合と比較すると「理解ある人」367名(58.9%)、「指導力のある人」74名(11.9%)で同じような傾向である。

これらのことから教師は、教授に当って学習者の学習効果を高める要

因について考慮し、その要因を整備するよう努力するとともに、学習者の生活状況を出来得る範囲でよく知ることは学習効果を高めることにつながる。従って生徒が自らのテンポで成長、発達していくことを十分に認識しなければならないであろう。

表4 生徒の望む家庭科の教師像

実数, (%)

	理解ある人	人間的魅力ある人	研究心のある人	指導力のある人	明朗、体力、健康	創造力のある人	わからない	答なし	人数
高校生	272 (56.5)	79 (16.4)	8 (1.7)	92 (19.1)	10 (2.0)	7 (1.5)	7 (1.5)	6 (1.2)	481
中学生	3672 (58.9)	29 (4.6)	43 (7.0)	74 (11.9)	42 (6.7)	0 (0.0)	15 (2.4)	53 (8.5)	623

高校生・中学生 \*\*\*

5. 生徒の今後の家庭科学習に対する評価

1) 高校生の男女共修時における生徒の望む学習内容 (表5-1)

男女共修時における高校生の望む学習内容について見ると、調理実習186名(38.7%)、家庭経営105名(21.8%)、家族関係80名(16.6%)、保育63名(13.1%)、住居34名(7.1%)で被服関係の授業の希望は5名(1.0%)で少ない。中学生の希望する教科では、調理249名(40.0%)、家庭経営81名(13.0%)、家族関係80名

(12.8%)、住居74名(12.0%)となっていて中学校から高等学校に進むにつれて希望増加になる学習は、家庭経営(中学校13.0%、高等学校21.8%)、保育(中学校9.2%

%, 高等学校13.2%)となっており生活全般についての学習や人間の成長発達に関わる学習に関心が高まることが見られる。従って教師は、生徒がその発達状態に応じて、効果的な学習をする条件について理解し、生活を営む上での衣・食・住に関わる最低必要とされる理論と技能の習得をふまえた家庭科の内容について検討してもよいであろう。

表5-1 男女共修時における生徒の望む学習内容 実数, (%)

	調理	保育	家族関係	家庭経営	住居	被服製作	手芸	衣生活のあり方	答なし	人数
高校生	186 (38.7)	63 (13.1)	80 (16.6)	105 (21.8)	34 (7.1)	5 (1.0)	0 (0.8)	4 (0.8)	5 (1.0)	481
中学生	249 (40.0)	57 (9.2)	80 (12.8)	81 (13.0)	74 (12.0)	11 (1.7)	4 (0.6)	9 (1.4)	58 (9.3)	623

高校生・中学生 \*\*\*

2) 今後の家庭科学習に対する希望

現在の家庭科学習に対して「今まで通りでよい」59名(12.3%)「何とも思わない」123名(25.6%)に対して、「基礎的なことは男子も受けるとよい」214名(44.5%)「男子も受けるとよい」64名(13.3%)を併すと57.8%のものは、(中学生の37.4%)に比べると高校生の場合希望している。これらのことから今後男子も家庭科学習をする場合、教材や学習内容について今後さらに研究する必要があると思われる。

表5-2 今後の家庭科学習に対する希望

実数, (%)

	今まで通りでよい	何とも思わない	わからない	基礎的な事は男子も受けるとよい	男子も受けるとよい	答なし	人数
高校生	59 (12.3)	123 (25.6)	16 (3.3)	214 (44.5)	64 (13.3)	5 (1.0)	481
中学生	107 (17.1)	188 (30.2)	47 (7.5)	153 (24.6)	80 (12.8)	48 (7.8)	623

高校生・中学生 \*\*\*

注)\* 5%有意水準で有意差あり

\*\* 1%有意水準で有意差あり

\*\*\* 0.1%有意水準で有意差あり

## ま と め

以上、目的に示したように、現場の家庭科教師は普通には高校生の生活の実態について、ある程度  
の理解を持って授業に臨まれていると思うが、高校生の生活の実態や、生徒の家庭科の学習に対する  
興味・関心については、殆んど知らない状態にある。従って生徒の生活実態や、家庭生活のあり方、  
家庭生活の営みの仕事などに対しての認識や生活行動、生活資材などに関わる知識や、技能の程度を  
知ることが、生徒の家庭科教育学習に対する興味・関心を高めることになるであろう。そして学習者  
のこの教科における学習効果を高めることでもあると思われる。学習意欲をわかせる先生として最も  
多くあげられているものは、「わかりやすく教えてくれる先生」であったり「おもしろい先生」「楽し  
い先生」など種々な要素が組み合わされるようで、「分かる授業」だけが望まれていないことが、この  
調査で明らかである。この点から、家庭科の授業を通して、教師と生徒の人間の触れ合いと同時に、  
教師の多角的思考の広がりが必要性が強調されてくる。今後の課題として高等学校における男女共修  
に関しての学習内容や、問題点について研究しなくてはならないと思う。

稿を終えるにあたり、アンケートに御協力いただいた倉敷市内4校の県立高等学校と、岡山市内の  
県立高等学校の諸先生と生徒に深く感謝いたします。

最後に、この調査、研究を行うにあたり御指導をいただきました岡山大学教育学部深田貞子教授に  
深く感謝いたします。

<付記> この研究は、第33回(昭和61年10月12日)日本家政学会中国・四国研究発表会において  
口述発表したものである。

## 参 考 文 献

1. 全国職業教育協会「技術・家庭女子向Ⅰ」昭和53年
2. 同 上 「技術・家庭女子向Ⅱ」昭和53年
3. 同 上 「技術・家庭女子向Ⅲ」昭和53年
4. 実教出版社「高校家庭一般」昭和58年
5. O.A.ホール, B.パオラッチ「家庭科教授法」宮原佑弘訳 原田一監修 昭和43年 P,103
6. 同 上 P,195
7. 県教育センター「教授における生徒との人間関係促進に関する研究」山陽新聞 昭和60年9月記掲
8. 原田 一 高陵社書店「家庭科教育法要説」 昭和60年4月1日
9. 大橋登史子 中国短期大学紀要第17号「中学校家庭科教育における教育実習効果に関する一考察」 昭  
和61年